

### 第 3 回バリアフリーとインクルーシブ防災セミナー「聴覚障がい者・盲ろう者と災害」を開催しました (2023/11/14)

テーマ：聴覚障がい者・盲ろう者と災害  
会場：災害科学国際研究所（仙台）

災害科学国際研究所災害レジリエンス共創センターは、2023年11月14日、第3回バリアフリーとインクルーシブ防災セミナー「聴覚障がい者・盲ろう者と災害」を災害研棟1F セミナー室にて開催しました。当日は、「聴覚障がい」および「盲ろう」の専門家・当事者を講師に迎え、障がい者の平時・災害時の課題や支援についてお話いただき、意見交換を行いました。

セミナーでは、はじめに栗山進一所長が趣旨説明を行いました。また、留意事項として「本日の講師である盲ろう者（弱視難聴）への情報保障のために、発言の際は所属と名前を告げてゆっくり話し、最後は『以上です』と締めくくってください」と参加者へ伝えました。

次に、聴覚障がいの当事者（ろう者）であり専門家の松崎丈・宮城教育大学教授がスライドを活用しながら手話で講演しました。松崎教授は手話や文字等の視覚的なコミュニケーション手段を用います。松崎教授は、「地域の学校で聴者とともに学んだが、学校では先生の防災についての話が聞こえず、避難訓練にも意味がわからないまま参加していた」自らの体験を述べました。また、東日本大震災の際、宮城県では聴覚障がい者の死亡率が市民全体より高率となったというデータがあり、それは聴覚障がい者に警報や周囲の状況に関する情報が届かなかったためである可能性があります。避難した聴覚障害者も、災害後、音声でやりとりされた支援情報や生活情報を入手しづらく、手話通訳者も被災した状況で孤立しがちでした。一方、聴覚障がい者のICTを活用したコミュニケーションについては、東日本大震災以降、進みつつあります。今後、国連が提言するように、ICT使用方法の普及などの課題を解決しながら発展させていくことが重要であると、松崎教授は述べました。

続いて、盲ろう教育の専門家である菅井裕行・宮城教育大学教授が講演しました。盲ろう者は、視覚と聴覚の二重の障害により、コミュニケーションおよび移動・空間定位、情報入手などに困難が生じます。盲ろうという障がいは「視覚障害プラス聴覚障害」ではなく、「一つの独立した障害カテゴリー」として理解する必要があります。盲ろう者としてはヘレン・ケラーが有名ですが、日本ではまだ認知度が低い状況です。盲ろう者は手書き文字、指点字、触手話、筆記、音声など、コミュニケーション方法や情報の受信方法が多様であり、それぞれの個別性に基づく支援が求められます。盲ろう者のニーズに合わせてコミュニケーション・情報・移動などの支援をする通訳・介助員の存在が必須です。

次に、みやぎ盲ろう児・者友の会会長・小山賢一氏が、盲ろうの当事者の立場から講演を行いました。小山氏は弱視難聴で、右耳に補聴器を装用し、主に音声でコミュニケーションをとります。聞き取れない時など、場面や状況に応じて、指点字や手書き文字（手のひら・手の甲などに文字を書いてもらう）を用いることもあります。東日本大震災発生時は、自力での避難は難しく、迎えに来た家族と間一髪、車で高台に避難し、津波から逃れました。自宅が津波で流され、避難所生活では物理的にも心理的にも動けず、またプライベート空間がなく、大きなストレスと困難に直面しました。その後に移り住んだみなし仮設住宅では、

（次頁へつづく）

環境認知に時間がかかり、さらに庭先から自力で外出ができなくなるなど多くの困難がありました。当事者団体である「みやぎ盲ろう児・者友の会」の交流会に参加して盲ろう者仲間や支援者と出会い、必要な情報が入ったり支援を受けられたりするようになりました。小山氏は、「盲ろう者は少数者で社会でも十分認知されていません。盲ろうは、視覚と聴覚の障がいの足し算ではなく、状況によっては障がいや困難が何倍、何十倍にもなるといえます。盲ろう者は、災害時に支援がなければ情報入手や他者とのコミュニケーション、避難が極めて困難です。東日本大震災の際にいただいた支援に感謝を表明するとともに、ぜひ、今後の防災計画や避難所マニュアルにおいて、盲ろう者も取り残されないようにしていただきたいと思います」と述べました。

講演に続く意見交換では、「障がいの多様性」、「盲ろう者にとって使いやすい避難所や仮設住宅」、「ICT のさらなる発展」等に加え、「障がい者を一方的に支援するのではなく、今回のように当事者ととも積極的に話し合う必要性」が話し合われました。当日は、約 30 人が参加し、活発な議論が行われました。

文責・写真：広報室、災害レジリエンス共創センター



栗山進一 所長



松崎丈 教授



菅井裕行 教授



小山賢一 氏



会場の様子